

特別優秀賞

もう一つの言葉で

北海道 光陵中学校 二年
須田 美希

かじかんだ手で、一生懸命伝えた言葉は……。

冬の日、私が友達と映画を観に行った帰りの電車の中のできごとでした。友達は疲れたようで寝ていたの、私は外の雪の世界をボーッと見ていました。ふと目をそらして目に入ったのは、辺りをキョロキョロ見ていた二十代ぐらいの女性でした。私は彼女に、

「大丈夫ですか？」と尋ねると、彼女はまだキョロキョロしていたため、私が肩をトンと叩くと、気づいたようで肩をビクッと跳ね上げ、こちらを向きました。彼女は私を不思議そうに見ていました。私はこのとき、もう1つの言葉を知るきっかけができました。彼女は髪を耳にかけ、指をさしました。それは補聴器でした。

この世界には2つの言葉があります。1つは口を使って音を発する言葉で、もう1つは手を使って発する「手話」。手話は指先まで繊細に使うきれいで貴重な言葉です。

補聴器を見て慌てたけれど一度冷静になり、マスクを外し口の動きと不器用な手話で、

「大丈夫ですか？」

と伝えると、彼女は驚いていました。彼女は手慣れた手話で何か伝えていました。私は簡単な手話しか分からないので、ハンドサインで、

「ちょっと待って」

と伝え、鞆の中から携帯電話を取り出し、

『不器用な手話でごめんなさい。簡単な手話しかわからなくて、もう一度教えてください』と打った画面を彼女に渡すと、ニコッと笑い何か文字を打っていました。渡され見てみると、

『手話分かるんだ、すごいね。って言ったの、嬉しいな、ありがと』

と書かれていて、私が手話で、

「少しだけ」と伝えると、彼女はクスッと笑っていました。

本題に戻り、私は携帯電話で、

『どこか行きたい場所がありますか？』と見せて渡すと、

『〇〇駅で降りたい』と書かれていました。その駅は私たちが降りる駅だったので、

『私たちもその駅で降りるので、一緒に行きましょう』

と伝えたら、彼女は私の手を握り嬉しそうでした。あっという間に目的の駅に着き、友達を起こし私たちは駅のホームに降りました。外に出て別れるとき、私はかじかんだ手で最後に、

「もっと手話を覚えたい」

と手話で彼女に伝えると、涙が彼女の頬を伝いました。そして、彼女は涙を拭いて、

「ありがとう」と、世界で一番きれいな手話をプレゼントしてくれました。

あれから私は手話を覚えて、今では簡単な会話ができるようになりました。彼女からは、本当に大切なプレゼントをもらいました。

—ありがとう—